

What can we do?

秩父市立尾田蒔中学校三年 大澤百恵

「水、でなくなっちゃうよ！」

両親の会社で働くネパール人の男性にこう言われたことがある。私は面倒臭がりやで、水道の蛇口を一気に捻って水を出す。だから水を出し過ぎてしまうのだ。でも、水が出なくなるというのは大袈裟だと思ったので、「いやいや、そんなことにはならないですって。」と言った。彼は「そうなの？」と不思議そうな顔をした。

私は水の出し過ぎで水が止まった経験も、水道に関して困ったこともない。水道から水が出なくなったら、すごく困るだろうし、生活が送れなくなることは想像できる。だが、それがなかなか毎日の生活と結びつかない。

私に「水、でなくなっちゃうよ！」と言った彼はネパールから来日したばかりで、いつも日本の「あたり前」に驚いている。私はネパールでは水が頻繁に止まるのか気になったので、「ネパールではすぐ水が止まるんですか。」と質問をした。彼は笑いながら、「離れた街ではそうだったけど、ボクの集落に「水道」ってものは無かったよ。」と答えてくれた。私はただ驚くと同時に、毎日どうやって水を手に入れていたのだろうと思った。彼は、「山を歩いて、水を汲みに行って生活していたんだ。」とも教えてくれた。彼は人生のほとんどを水道のない環境で過ごしてきた。私には大変すぎると思えたが、彼にとってはそれがあたり前のことだったので、水汲みも苦痛に感じたことはないそうだ。私は今まで水道の無い環境におかれたことがない。だから、水道から水が出るのが特別だと思ったことがなかった。身近にあり過ぎることは、自然と「あたり前」になっていくのだと思う。それは同時にその「あたり前」について考えるのをやめてしまうことにつながるのではないだろうか。

私は、彼の話を引きかけに水道について考えた。先日関西地方で発生し

た地震の際に、ニュースでとり上げられていたのは水道・水道管に関することだった。老朽化が進んだことが原因で破裂し、断水や道路の冠水など、生活に大きな影響を及ぼしたというものだ。そして、このニュースと同時に、全国の主要水道管に占める四十年超えの老朽化の割合が、約十五パーセントだという事実を知った。

今まで、近所で水道管の工事が行われていても、内容に興味を持ったことは無かった。だが、その事実を知ってから家の周りはどうなのか、住んでいる街はどんな対策をしているのかが気になるようになった。

そのことについて調べて分かったのは、水道管を新しくするためには巨額の費用がかかること、また人口の減少が進む現在は、水道の使用料を上げるなどしない限り、老朽化の進行に交換が追いつくことは難しいということだ。そして、料金の引き上げには多くの反対の声が伴う。

なぜ、料金の引き上げに反対するのだろうか。料金を上げることで工事ができるならば、上げるべきだと私は思う。しかし、実際に支払っている母は、先月料金の請求書が届いたときに、「なんでこんなに高いのかなあ。」とこぼしていた。それを聞いた私は「これだ！」と気づいた。何故、料金を上げる必要があるのかを知らないことが問題なのだ。

今、私達に必要なのは水道のこれからについて考えること、興味を持つことなのではないだろうか。私の考えが変わったのは、水道管の老朽化のことを知り、水道から水が出なくなることが現実味を帯びたからだ。私達一人一人が水道を守っていくためにできることは、理解を深めることだ。

私は、まだ狭い視野でしか水道を見ることができない。だが、私が考えているよりもっと、水道に関する問題は、大きなものだと思う。私は、これから考えることをやめずに、また、誰かにこのことを伝えていきたい。先日、彼が「やっぱり、日本のものはスゴイ。水道からも水、出なくなるしないしね。」と言ってきたので、「でもずっとそうとは限らないそうです。水道管は古くなるから。」と伝えると、彼は「じゃあ、この辺で水汲み場を

探しておかないとね。」そう言った。

—これからもずっと、水道から水を使う暮らしを続けていくために、私達に何ができるだろうか。